

映画 の中の 子ども たち

第1回 「プレシャス」

- 性的虐待を乗り越えて生きる -

川崎 二三彦

(子どもの虹情報研修センター)

世間にはあまり知られていないが、マスコミ問題に鋭いメスを入れる気骨ある雑誌「放送レポート」は、私が愛読し始めてからでもすでに20年以上になる。この中で真っ先に読むのが、長らく連載されている「映画の中のマスコミ」。筆者の加藤久晴氏は映画におもねることもなく、この雑誌らしい切り口で批評を続けている。だったらこんなふうにして「子ども」をキーワードにした映画評を、誰かどこかで書いてくてもいいのにな、と常々思っていたところへ、Web マガジン企画の案内をいただいた。

「映画は好きでよく観ているが、まともな映画評が書けるわけではないし、最近は観てもすぐに中身を忘れてしまう。だが、そんな自分を戒める意味もこめて、試しに『映画の中の子どもたち』とでも題して何か書き綴ってみようかな」、一瞬、こんな気持ちが私の脳裏を掠めたのが(つまり読者の皆さんの)運の尽き、かも…。

この映画、まず何と言っても主演を張った新人女優ガボレイ・シディベの存在感に、いや元へ。“存在感”じゃなくて“存在自体”に誰しもが圧倒されてしまうだろう。何しろスクリーンを一人で占領するかのようなボリューム。原作小説でも、主人公のクレアリス・プレシャス・ジョーンズは、90キロまでしか計れない体重計の針が振り切れる重量があるという設定だから、まさに本作品に打ってつけの俳優



なのだ。おそらく彼女でなければずい

ぶん違った印象の映画になったのではないだろうか。観た映画をすぐに忘れてしまう私も、多分この俳優のことは忘れないと思う。

それはさておき、観ていてこちらが息苦しくなる映画だった。小説の原題は“Push”というのだけれど、この言葉、出産シーンでは「いきむ」という意味で使われているらしい。実はプレシャスは、わずか12歳で自分の父親の子を孕み、出産し、さらに16歳になってから、この父の2人目の子どもを妊娠しているのである。そして、おおかたの予想どおり彼女の母が彼女を守るわけではない。むしろ逆だ。

「プレシャス・ジョーンズ、よくも私の亭主とファックしてくれたね、この汚らしい淫売娘！」

母は毒つき、児童福祉業務に携わった者が多かれ少なかれ経験するように、役所が支給する娘とその子どもの養育費を

当て込んで生活している。

「さいしょは、あたしのでえしゅをぬすんで！ こんどは、手当をだいなしにして！」

俳優の顔も名前も覚えられない私は、母親役を演じたモニックについても全然知らなかったのだけれど、その体軀を主役のガボレイ・シディベと思わず見比べてしまった。彼女に勝るとも劣らぬ堂々たる姿で、憎々しくかつ哀しい母親を熱演、好演。児童相談所で出会った何人かの母親の姿が次々とダブってしまうのは、決して私一人ではあるまい。モニックはもともとはコメディアンらしいが、本作で主演女優賞や助演女優賞を数多く獲得したこの二人が、映画に独特の雰囲気を出している。



ところで、児童福祉司の経験を持つ私にとって見過ごせないシーンがあった。ある日の面接で、ソーシャルワーカーが席を立ったわずかな隙に、プレシャスが自分のケース記録を持ち出すのである。

「ファイルを盗むというのは……」

「レイン先生、あのファイルを盗まなかったら、あたし、自分がどんな問題をかかえているか、わかんなかったよ！」

このシーンを観ていて血液がかすかに逆流するのを意識しながら、私たちの間でも知らず知らずのうちに似たようなことが生じていないか気になってしまった。ただしファイル管理の問題ではない。長年の勤務の間に児童記録票紛失という

問題の解決を迫られたことがなかったわけではないが、そうではなくて、相談を受けている側が子どもや保護者をそっこのけにして勝手に方針を決めたり、あるいは決めた方針をまともに説明せずに済ませていたりしてはいないかということだ。

幼年期から続く実父による性的虐待だけでなく、実母のひどい仕打ちや、さらに過酷な事実を引き受けねばならなかったプレシャス。現実世界で本当にこんなことがあるのだろうか、と一瞬目を背けたくなるけれど、原作者のサファイアは、映画の舞台となったニューヨークハーレムで10年間、若者たちの教育に携わっていたという。

「教えているときに会った子たちの中には、HIVに感染した子、父親に虐待されていた子、文盲の子、様々な状況の子供がいました。それらの子たちが集められて“プレシャス”という一人の少女になりました」

インタビューで彼女はこう語っているが、私たちが生きるこの社会の一断面を、紛れもなく鋭く切り取った映画だと言える。

とはいえ本作は、単に現実の厳しさ、酷薄の運命を殊更のように見せつけるだけの映画ではない。というのも、アルファベットすら読めなかったプレシャスが、自らの意思で通うことになった代替学校の教師と生徒たちとの生活を通じ、自らの人生を自らの足で歩もうとする姿を中心軸に据えているからである。見終わって希望を感じることのできる映画、それが「プレシャス」だ。

(鑑賞データ：2010/04/24 TOHO シネマズ二条)